タジキスタン山岳バダフシャーン自治州における調査活動

澤田　稔

わが国における中央アジアの歴史についての研究は多くの成果をあげてきているけれども、関心が薄く未開拓である地域や対象が残されていないわけではない。そのひとつとして、筆者は近年、中央アジア山岳高原部、とりわけタジキスタン共和国の山岳バダフシャーン自治州（Viloyati Mukhtori Kūhistoni Badakhshon; Gorno-Badakhshanskaya Avtonomnaya Oblst'）における地域社会とその歴史に着目している。本稿では、短期間ながら 2009 年 9 月と 2011 年 8 月に同自治州を訪問して民間所蔵文書と史跡を調査した活動のおおまかな経緯を述べるとともに、それに関連して 2011 年度から開始した「近現代の中央アジア山岳高原部における宗教文化と政治に関する基礎研究」のプロジェクトを紹介したい。

山岳バダフシャーン自治州において調査を実施する計画を本格的に検討したのは 2008 年 10 月のことである。イスラーム地域研究東京大学拠点の研究課題「18-19 世紀東西トルキスタンのイスラーム指導者とムスリム住民の広域的活動に関する基礎研究」（2006 ～ 2008 年度、研究担当者：澤田稔、河原弥生、ステファン・ドゥドワイニョン Stephane Dudoignon）による招聘でタジキスタンより来日したウミード・シールザードシャーエフ氏（Umed Sherzodshoev、NGO 団体 Merosi Ajam 副代表）[(1)] から、河原弥生氏とともに同自治州のイスマーイール派信徒居住地域における民間所蔵文書のおおまかな年代、種類、点数について説明を受けた。そして、7 つの郡（nohiya; rayon）から成る同自治州のうち、イスマーイール派信徒の主要な居住地である自治州西南部の 4 郡（ルーシャーン郡、シュグナーン郡、ラーシュトカルア郡、イシュカーシム郡）において実地調査するのに必要な大まかな日数もシールザードシャーエフ氏より知ることができた。

---

(1) この来日時に行われた同氏の研究報告「パミールの歴史と文化および現在のパミール研究についての概観」（日本語訳：河原弥生、第 13 回中央ユーラシア研究会特別セッション「中央アジアのイスラーム王権」2008 年 10 月 25 日、東京大学）がイスラーム地域研究東京大学拠点のウェブサイト（http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/centraleurasia/meeting/2008/081025_shirzad.htm、閲覧日：2012 年 3 月 11 日）に掲載されている。

2009 年 9 月 8 日、筆者は川本正知氏（奈良産業大学）、河原弥生氏、シールザードシャーエフ氏とともに四輪駆動車でタジキスタンの首都ドゥシャンベを出発し、クーラーブ経由で山地帯を抜けパンジュ河（アム河上流）のほとりに出て、その沿岸の道を上流へと順調に進んだ。しかし、山岳バダフシャーン自治州西北部の入り口にあたる町カライ・フム（Kala-i Khum）の手前で道路工事による通行止めに遭遇し、付近の貧相なドライブイン風の建物で宿泊せざるを得なかった。翌日の昼過ぎにようやく工事現場を通過することができたが、自治州都のハールグ（Khorugh、ホログ Khorog）に到着したのは夜遅くだった。なお旅行案内書によると [Krotov 2011: 99]、ドゥシャンベからクーラーブ経由でハールグまでの距離は 600km である。

我々はこの時の主要な調査対象地としてハールグから最も遠いイシュカーシム郡を選んだ。ハールグからパンジュ河右岸に沿う道を 220km さかのぼったランガル（Langar）村へ直行し、そこから往路を逆にくだりながら村々で調査をおこなった。次回の 2011 年の踏査で実見できたのであるが、ランガル村から先はパンジュ河がパミール河とワハン河（アフガニスタン領内）の二手に分かれ、パミール河の右岸（北側）はタジキスタン領内であるものの、その景観は大きく様変わりしていく。ランガル村までは、北方の山地からの渓流がパンジュ河に流れ込む狭い平地ぞいに村落が形成されている。それに対してパミール河沿いの道はランガル村から急峻な山岳路となり、ムルガーブ郡へ入ってパミールの高原地帯の平坦路へと続き、集落もきわめて少なく、まばらである。複写した文書はランガル村で 24 点、その西方近くのゾング（Zong）村で 2 点であったが、それぞれで 1 泊したランガル村と郡都イシュカーシム（Ishkoshim）のあいだにはムスリム聖地や古代の山城遺跡などの史跡が多くあり、それらの踏査にも時間を割くことができた。なお複写文書の年代、種類などについては、2011 年のものを含めて後述する。

ハールグ市に戻ってから、日帰りでラーシュトカルア郡の同名の郡都から約 10km さかのぼったバルヴァーズ（Barvov、シャヴァーズ Shavoz）村で 40 点の文書を複写した。ハールグ市内では上述のゾング村出身者から 31 点、我々の共同研究者であるシールザードシャーエフ氏から 19 点の文書を複写した。同氏はハールグ市から北 17km ほどのポルシュネフ（Porshnev）村のピール（宗教指導者）の家系の出である。我々はシールザードシャーエフ氏の親族の家をポルシュネフ村（サラーイ・バハール Saroi Bokhor 村）に訪ね、祖先のピール、サイイド・ファッルフ・シャー夫妻の墓廟も見ることができた。

9 月 16 日に山岳バダフシャーン自治州における調査活動を終え、翌日ハールグを発ち、カライ・フムからは往路とは異なるタヴィルダラ経由の道でドゥシャンベに戻った（ハールグからドゥシャンベまで 536km[Krotov 2011: 99]）。なお本稿で言及していないものも含めて、

踏査した史跡については別の調査報告[(2)]に記している。

2011 年の調査は、後述の「近現代の中央アジア山岳高原部における宗教文化と政治に関する基礎研究」プロジェクトの研究構成員である稲葉穣氏（京都大学人文科学研究所）、同研究協力者の河原弥生氏とともに、前回と同じくシールザードシャーエフ氏（同研究協力者）の案内で、さらに同氏の夫人であるサバーハト・ダーナヤーロヴァ氏（Sabohat Donayorova）の援助を得て無事に遂行することができた。

タヴィルダラ経由の道で 2011 年 8 月 8 日にハールグに入った我々は、翌日から 11 日までハールグ市内と日帰りの可能なルーシャーン郡で文書の調査と史跡の見学をおこなった。その結果、ハールグ市内で 9 点、ルーシャーン郡バッルーシャーン（Barrushon）村で 10 点の文書を複写できた。

12 日にハールグ市内を離れてパミール・ハイウエー（ハールグからクルグズスタンのオシュに至る幹線道路）を進み、翌日ムルガーブ郡のアリチュール（Alichur）村の民家に泊まり、13 日ムルガーブ（Murgob）の町に到着した。途中のシュグナーン郡では、リーヴァク（Rivak）村で文書 1 点を複写し、バーゲヴ（Bogev）村のカーフィル・カラという古代遺跡、ヴァンカラ村（Vankala、イマーム村）のイマーム・ムハンマド・バーキルという名の聖地を訪ねた。少し側道にそれるが、アリチュール村西方の青く澄んだヤシル・クル（Yashil Kul）湖の畔に立つこともできた。この湖畔は 1750 年代末にカシュガル方面から敗走したカシュガル・ホージャ家のホージャム兄弟たちが追撃の清朝軍と戦闘を交えたとされる所であり、筆者は感慨にふけった。

14 日の早朝にムルガーブの町を去り、パミール・ハイウエーを少し戻ったところから荒蕪地と草原に轍の残る間道にそれて、高原の道をゾル・クル（Zor Kul）湖方面に向かった。途中、温泉のあるジャルトゥ・グンベズ（Jarty Gunbez）を経てゾル・クル湖北岸の道を辿り、パミール河沿いにハルグシュ峠からの道路に出て、ムルガーブ郡を去りイシュカーシム郡に入った。夕方、2 年前に訪ね宿泊したゾング村の民家に到着した。ハールグからグント渓谷を抜けてパミール高原部のムルガーブに行き、高原地帯を辿ってワハン渓谷のランガル村まで走破したことで、山岳バダフシャーン自治州西半部の渓谷と東半部の高原との間で地形、集落分布、道路状況が大きく異なる様相を実見できた。

ランガル村からパンジュ河に沿い、イシュカーシムの町を経てハールグに至る道路は、すでに 2 年前に往復したルートである。そのため、今回はハールグへの帰還を急ぎ、沿道にあ

---

(2) 澤田稔「タジキスタンおよびウズベキスタンにおける調査報告」（イスラーム地域研究東京大学拠点のウェブサイト（http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/centraleurasia/report/2009/sawada/index.htm、閲覧日：2012 年 3 月 11 日）所載）。なお、同ウェブサイトにおける「概要」の欄の「日程」が 2007 年 9 月 7 日～ 9 月 23 日となっているが、2007 年は誤りで、2009 年が正しい。

るごく一部の史跡と聖地を再訪しただけである。しかし、大統領のハーログ市などの訪問による交通規制の解除を待つため、途中の温泉地ガルム・チャシュマでの逗留を余儀なくされた。ただ、時間的な余裕ができた結果、ガルム・チャシュマの温泉に関わる聖地を訪ねることが出来たのは幸いであった。

17 日にハーログに帰り着いてから 19 日に当地を発ってドゥシャンベに戻るまで、ハーログ市近郊の村落において文書調査をおこなった。すなわち、シュグナーン郡のスーチャーン（Suchon）村で 19 点、いずれもラーシュトカルア郡に属するタヴデム（Tavdem）村で 1 点、ヒドルジェヴ（Khidorjev）村で 8 点の文書を複写した。

以上の 2009 年と 2011 年の現地調査において複写することのできた民間所蔵の文書は、河原弥生氏の整理作業に拠ると、164 点にのぼる。それぞれ文書の内容についての本格的な分析は今後の課題であるけれども、主として河原氏の研究 (3) に拠り、それらの文書全体のあらましに触れておきたい。その大半はペルシア語で書かれており、わずかではあるが、ロシア語も使われている（タイプ打ちと手書き）。最も古いと思われる作成年代のものとしては 1120 年代（西暦 1708 ～ 1717 年）にアフガニスタン領のファイズアーバードで作成された文書 1 点がある。また、比較的古いものとして 1856 ～ 1877 年に作成されたアーガー・ハーン 1 世（イスマーイール派の第 46 代イマーム）の書簡 9 点があるものの、19 世紀末から 20 世紀初めにかけて作成された文書が全点数の大半を占めていると思われる。上記の書簡類にピール（宗教指導者）職を代々継いだ家系の系譜書やアーガー・ハーンによる任命書などを加えると、文書の大半はイスマーイール派に直接関わるものであると見られる。しかし、ブハラ・アミール作成の文書や土地関係の証書、法廷関係の文書その他も見いだすことができる (4)。

最後に、現在進行中のプロジェクト「近現代の中央アジア山岳高原部における宗教文化と政治に関する基礎研究」を紹介したい。このプロジェクトは、イスラーム地域研究東京大学拠点が文部科学省「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」委託費により公募した研究課題である。研究構成員は筆者、稲葉穣、宇山智彦（北海道大学スラブ研究センター・教授）の 3 名であり、研究期間は 2011 ～ 2012 年度の 2 年間である (5)。東西トルキスタンの中間地

(3) 河原弥生「タジキスタン共和国山岳バダフシャーン自治州における民間所蔵文書調査報告」（イスラーム地域研究東京大学拠点公募研究「近現代の中央アジア山岳高原部における宗教文化と政治に関する基礎研究」第 2 回研究会、2012 年 1 月 28 日、東京大学）。

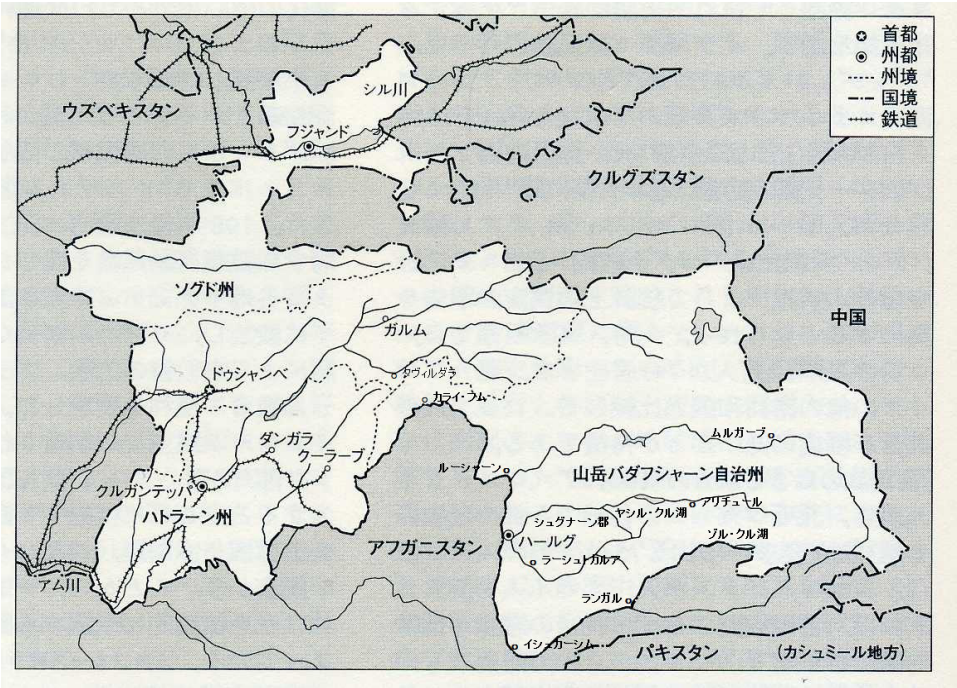
(4) 2009 年に複写した文書の一部は川本正知「イスラーム法廷文書―イクラール文書を中心として―」、河原弥生「タジキスタン共和国山岳バダフシャン自治州における民間所蔵文書調査」（いずれも、イスラーム地域研究京都大学拠点公募研究「イスラーム法とテクノロジー」2009 年度第 3 回研究会、2009 年 12 月 19 日、京都大学）で紹介されている。

(5) 本プロジェクトの詳細について、イスラーム地域研究東京大学拠点のウェブサイト（http://www.l.u-

帯として付随的に説明されることの多かった中央アジア山岳高原部とその住民（例えば、クルグズ人やパミール諸民族）に焦点を当て、(1) 山岳高原部から四通八達する交通路や生活域の歴史地理学的把握、(2) クルグズ人やパミール諸民族などの住民における宗教文化の形成過程と現状の調査究明、(3) 近現代史の解明、という 3 つの具体的アプローチにより研究を進めている。上述した 2011 年 8 月の山岳バダフシャーン自治州における実地調査はこのプロジェクトの研究活動として実施したものである。実施調査以外に、これまで 2 回の研究会を開催し、2012 年の秋には国際会議（ワークショップ）を開催することを計画している。本プロジェクトの活動全般とその国際会議に関心が寄せられることを願っている。

参考文献

Krotov, Anton. 2011. *Tadzhikistan. Pamir. Prakticheskii i transportnyi putevoditel'*. Moskva: Geo-MT, pri uchastii TK Skrinti.



（小松久男ほか（編）『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005 年、316 頁の地図に地名を追加）

（富山大学人文学部教授）

tokyo.ac.jp/tokyo-ias/monka/project/index.htm、閲覧日：2012 年 3 月 11 日）を見ていただきたい。